

つながる大切な命

沖縄市立コザ小学校 六年

佐和田 杏樹

「はーっはっは。」

こんな笑い声の響く私たちの教室、みんなの笑顔が広がる私たちの教室は、とても平和だと思います。

では、戦争が起きる前の教室はどうだったのでしょうか。私は今と同じようにすごく平和だったのではないかと思います。

しかし、戦争が始まり、「バーン、バーン」という爆発音とともに、何も罪もない人たち、大きな夢を持つ子どもたち、すべての人たちの笑顔と大切な命は消えてしまいました。

私が住む沖縄県は、太平洋戦争中に地上戦の舞台となり、多くの方が亡くなりました。がまの中で暮らす人達。自ら命をたつ人達。血だらけで、「助けて」と言っている人達。泣いている子供達。けんじゅうで打たれている人達。赤い海に浮いている人達。手や足がない人達。ばく発音と共に大切な命が消えていく。何も食べれずおびえる人達。いもや、とても小さいおにぎりを食べて生きのびる人達、目の前で、「助けて」と言っているのに、おいていかないといけない時。はだして服もボロボロで、赤い体の人達。

戦後七十年。私の祖母は現在七十二歳。二年間ほど戦争を体験している祖母に戦争のことをたずねてみました。

「おばあちゃん、戦争はこわかった？」

「おばあちゃんは小さかったから覚えていないさあ。でも、いつもおばあちゃんのお母さんに感謝している。戦争中や戦後、どんなに大変で苦しいときでも、何も出来ない私を守り続けて生かしてくれたから…。」

祖母は私の目を見つめ、涙を流しながら話してくれました。

もし、今本当に戦争が起きて、血のつながりのある人を守らなければいけなかったら…目の前で多くの人が殺されたら…自分の家族が目の前で息を失っていたら…私はどうするのだろう。さびしい気持ちでいっぱいだろう。とても悔しいだろうと思いました。

そんな状況で、祖母を守り続けたいひいおばあちゃんに私は会いたくありませんでした。もし、会えてたら「ありがとう」が心から言えたのにと感じました。もし、祖母がいなかったら、父もいないし、私たち六人もいないのです。

私は、毎回戦争の話を聞くと、

「どうして、アメリカは悲しい思いをしたのに、日本と戦争をしたのだろう。」
と思っていました。きっと、私は悔しかったからではないかと思っています。私にも同じ気持ちを感じる時があるからです。兄弟でケンカをした時です。

「絶体にあやまらない。」

と思ったことが何度もあります。自分も相手も悪いはずなのに、相手の悪いところばかり主張して、ムキになることがあります。

でも、その小さな気持ちと戦争はつながっていて、その積み重ねが絶体に起こしてはいけない戦争を起こしてしまったと思うのです。素直に自分の悪いところを認める大切な言葉「ごめんなさい」は、平和な世界になくってはならない言葉だと思います。

私は、祖父、祖母、そして家族とつながり、そして、「見守られ、愛され、大切にされ」ながらここまで育ちました。人間は、人と人とが過去、現在、未来とつながり合って生きています。今の平和を続けるためには、自分を自分で愛し、自分が愛されていることに気づき、自分のつながりをきちんと分かること、そして自分が今生きていることに感謝することが大切です。

世の中には、自分で自分の命を消してしまう人もいます。友だちを傷つけてしまう人もいます。みんなが尊敬し合い、協力して助け合えば、いじめや差別もなくなり、二度と戦争が起こることはないと思います。

私は沖縄の人として、沢山の人たちの命をうばった戦争を忘れてはいけなと思います。沖縄人だから平和を伝える必要があると思います。祖母が私に伝えた思いを、私の兄弟や友だち、そして自分の子孫にも伝えていきたいと思っています。

戦争の二度とない世界を創り上げるためにも、祖母の涙を忘れないように、一人一人が自分の命を大切にすることを伝えていきたいと思っています。